100号記念エッセイ

私の『表現研究』回顧

中島　一裕

思い返せば今年で38年経ったことになるが、『表現研究』の第24号（1976年9月発行）に「一人称代名詞の二人称転換現象」という論文を掲載していただいたのが、私が書いたものが学会誌というものに載った最初であった。これは、友定賢治氏との共著なのであるが、愛知淑徳大学で開催された、この年の表現学会の全国大会で共同発表をした内容をまとめたものである。実は、この共同発表は、当時、表現学会の運営の中心におられた故今井文男先生からのお誘いによるもので、「われ」「おのれ」といった1人称代名詞を相手を指して2人称代名詞として用いるのはどういう表現の機構によるものかを考察し、全国大会で発表してください、という課題が大阪教育大学の大学院生に与えられたのである。発表の1年あまり前のことだったと記憶する。当初3、4人で始めた研究だったが、とちゅう年度が変わって勤務の都合で共同研究に支障が生じたことから、結局、友定氏と私とで共同発表をし、その内容を論文化したのであった。発表の前年度の全国大会でだったと思うが、今井先生に、参考になるようなものをご教示願えませんかと伺うと、森有正がそのようなことを書いているから、読んでください、といったお返事だった。このことからすると、今井先生としては、日本人の思考形式や発想法にかかわる問題を表現の機構という見方で整理することを求めておられたのかもしれない。当時、三浦つとむの観念的自己分裂といった考え方が流行し、三浦はその例証として「われ」「おのれ」の問題を用いていたので、こうした考え方も参考にしたが、書き上げた論文として見ると、ずいぶん語法論的、語誌的なものと映ったかもしれない。しかし、私としては、代名詞、というよりは指示語における称格の問題、主体間の問題、時代や語彙を超えた表現の機構の問題など、表現論というものを考えるうえで多くのものを学ぶことができたと考えている。

この論文を今井先生の勤務大学宛に郵送したところ、受取状の中に、「夏休み中だから自宅へ送ってもらったらよかったのに」という内容が書き添えられていた。この一事をもってしても、当時今井先生が中心になっておられた『表現研究』編集のご苦労が思いやられたものであった。

その後、表現学会と『表現研究』は、私の研究活動の中心となり、私を牽引してくれた。今にして思えば、表現学会と『表現研究』とは、人を育て、新しい思考を導

き出す場でもある。表現、なかんずく言語表現はいくつもの顔を持ち、その1つ1つが解明されることを待っている。それに取り組むためには、その1つ1つに見合う表現の機構を見通す準備が必要であろう。表現学会と『表現研究』とがそうした熱意に勇気と希望とを与える存在であることを願ってやまない。

（帝塚山大学）

「表現研究」の編集・発行

永田　友市

表現学会は今井文男氏の首唱・創設された学会である。表現学とは聞き慣れぬ語で、何をどのように研究するのか会員の認識にも幅があった。しかし今井氏は独特の表現論で学会を推進された。代表理事には真下三郎氏が選出されたけれども、実質的な学会の運営・推進の中心は今井氏であった。「表現研究」の編集・発行も、学会の庶務・会計もほとんど今井氏の担当であった。発足当初は会員数も少なかったから会費収入も限られていて会計は苦しかった。会費倍増負担の協力会員（維持会員）を募りもしたし、時に今井氏が私費を投入されることもあった。

昭和59年4月、私は愛知淑徳大学に勤務することになって、今井氏と毎日顔を合わせるようになった。学会の庶務や会計の手伝いをした。「表現研究」の発行の手伝いもした。校正や発送作業の手伝いである。雑誌ができあがってくると、今井氏の研究室で作業をした。宛名の名票を封筒に貼る、雑誌を封筒に入れる、ガムテープで封をする。それを今井氏と2人でやった。

編集はすべて今井氏であった。原稿の依頼、届いた原稿の審査、割りつけ等すべて今井氏が処理された。編集の基本方針で今なお踏襲・継続されていることがある。表紙裏に掲載されている「入会のすすめ」である。この文章は「表現学とは何か」に答えるとともに、そのあり方をも示すものである。この文章の毎号掲載は今井氏の強い意志によるものである。

創刊号では表題を「入会のすすめ」とし、代表理事真下三郎氏の名であるが、文章の基本は今井氏である。20年を経て昭和58年、表題を「迎20年の記」として表現学の目指す研究視野・射程を言語論・視点論・文芸論・認識論など10項目に具体的に示すものとされた。平成17年、82号から表題は「表現学会入会のすすめ」、文章全体が改められたが、研究領域10項目はすべてそのままである。

今井氏は平成7年、鬼籍に入られた。氏は生前、「表現研究」が100号を数えることを予想しておられたであろうか。第100号にも表紙裏の文章その他に今井氏の遺志が脈々と流れている。今井氏はそれにかすかな驚きと大きな喜び・満足をおぼえておられるに違いない。

（愛知淑徳大学 名誉教授）

『表現研究』第36号からの我が軌跡

小林　千草

故馬渕和夫先生のご慫慂により、『表現研究』第36号の「私の研究　対象と態度」という枠で「聞書抄物のことばの解明をめざして」という題で報告めいたも

のを書かせていただいたのが、私と『表現研究』との出会いであった。発表年次は昭和57年（1982）9月である。

「聞書抄物のことばの解明をめざして」は、当時の私の研究対象である「聞書抄物」を一覧的に紹介し、それらをどのような観点から調査しているか、つまり、研究態度――研究方法を述べ、現段階で得られた結果少々と、これからの展望を記したもので、今読み返すと全く味わいに欠けるものとなっている。さぞかし、馬渕先生はがっかりなさったものと思うが、寡黙な方でいらしたので、特に何もおっしゃらなかった。

その小論では、「講者・講義内容を同じくする聞書諸本間の言語的相違の解釈にⅰ）講者のことばの浮動性とバラエティー　ⅱ）筆録者の恣意性と筆録文体差　ⅲ）筆録者の言語介入　という3本の柱を立て、言語項目ごとにこれらの要因がどのような比重で現われるから現象としての資料間の相違が出ているのかを考察したい」と述べている。すでに、擬声擬態語と接続詞で把握できていた調査結果を生かし、接続詞は筆録文体差により大きく左右されているし、そのため、筆録者の言語介入も擬声語より大きいと、まとめている。「今後の課題」として、聞書抄物の文末辞ゾの性格や機能に興味を引かれていると記し、ゾ終止文体という枠組みがあるので、筆録のメカニズムを探るのは容易ではないだろうことも付け足した。容易でないとわかってはいても、納得のいかないまま次へ進めない性質（たち）なので、文体としてのゾ終止文、口語文献における終助詞ゾなどにつき、あちこち資料とともに歩き回った。取り組んでいる最中は、とんでもない密林のなかに迷いこんだものだと泣きたくなる時もあったが、「天草版『金句集』の「心」におけるゾ終止文の性格」「キリシタン宗教書におけるゾ終止文の性格とその文章史的系譜をめぐって【1】」「同【2】」「キリシタン口語文献の終助詞ゾ」（「大蔵虎清本狂言におけるゾ」分析を含む）「終助詞ゾと敬意表現――虎明本狂言を中心に」（「大蔵虎寛本狂言におけるゾと敬意表現」分析を含む）などという形で継続的に発表する機会に恵まれた。折々に発表したそれらは、『中世のことばと資料』（1994年11月武蔵野書院刊）に収められているが、その長い時を要する調査に赴くように背中を押してくれたのは、『表現研究』第36号の執筆であった。公にとりくむ姿勢を述べたのだから、泣きたくても進むほかはないという、“背水の陣”を他動的に敷かされた格好である。その意味で、馬渕先生と表現学会には深く感謝せねばならない。

その後私は、国語史と表現論を私なりにブレンドした「表現論的研究」なる方法論に行き着き、この方法で中世歴史資料を解読したり、能狂言論に取り組んだりしている。これも、「表現学会」に所属しているという安堵感がどこかで支えてくれている活動なのだと思っている。

（東海大学特任教授）

「表現を磨く」

山内　信幸

「表現」というものについて意識するようになったのは、大学受験の浪人時代

に遡る。いわゆる少し長めの和文英訳問題に取り組んでいた時に、予備校の先生から「日本語らしい表現をできるだけ英語に訳しやすい日本語に移し替えてから、問題に取り組むように」というような助言を受けたことがあった。その際に、英語の能力の前提に日本語の能力があることに気付いた。

また、学部時代には、「英語表現法」という授業で、様々な文学作品の翻訳例をテキストにして、全体の文構造にとどまらず、1語1語の訳語の選択に至るまで、実にレベルの高い講義を拝聴する機会に恵まれた。もともとジャーナリズムの世界から大学の教員に転じられた嘱託の先生ではあったが、つねに平易で簡潔な英文を書くことを旨とされ、そのうえで、英語としてのリズムにも配慮された、まさしく「英語の達人」と呼ぶにふさわしい方の講義であった。この時に初めて英語の文体というものを自らの問題として意識できるようになった。

今振り返ると、常に日英語の文章作法の手本とさせていただいてきたのは、今は亡き恩師である同志社大学名誉教授の石黒昭博先生であった。先生は、日本語も英語も達意の文章を駆使される方で、その実践としてたいそう筆まめな方であった。自分の文体といえるものがまだ定まっていなかった当時、先生の認められる文章はぴりっと引き締まった文体の中に常に含蓄深い文言がちりばめられ、しかも、その文章のリズムは小気味よく整えられ、まさしく手本と呼ぶにふさわしいものであった。先生はもともとアメリカ文学で卒論を書かれ、大学院時代には新言語学を修められた方であり、文学としてのこだわりと科学としての言語学の理路整然さを体現された方であった。

それ以来、ことあるごとに、何とか先生の文章・文体に近づきたい一心で、無意識のうちに先生の文章を真似る努力を続けてきた。いつの時か、共著の本のまえがきの下書きを準備して、先生に見てもらった際に、「山内君、君は僕の文章に似てきたなあ！」というお言葉をいただき、殊の外、嬉しかったことを覚えている。

自分にとって「表現」とは、「文は人なり」という言葉があるように、全人格的なものであるがゆえに、常に成長を続けるものである一方、その修練段階の初期は、優れたものをただ模倣するだけで必要十分ではないかと思ったりもする。

（同志社大学教授）

表現研究100号によせて

藤井　俊博

表現学会が創立されて、50周年を迎え、会誌『表現研究』も100号を迎えることになりました。私は、平成17年から18年にかけて糸井通浩代表理事のもとで事務局を務めさせていただきました。平成2年に入会した私の手元には会誌の51号からのバックナンバーがあり、学会の歴史の半分に在籍したことになります。事務局を担当させていただいたときに、会議などで50号以前の号に多く投稿されていたベテランの先生と接する機会もでき、私にとっても学会にとっぷりつかるいい機会になりました。大会の中での空気も、いい意味でリラックスした雰囲気が漂っているようです。

研究する上で、いくつかの学会に所属していますが、表現学会では他の学会に比べて、応用的・発展的テーマが多く見受けられます。たとえば係り結びの研究は、文法現象として日本語学の分野で研究が多いテーマですが、そこにおいては係り結びの成立や衰退、あるいは個々の助詞の使い分けや、文中での機能の問題などが大きな観点として取り上げられています。それに対して、『表現研究』に見られる係り結びの研究は、個々の係助詞がどのような文内容と関わるのかといった観点や、個々の物語の叙述を構成する上で係り結びがいかに機能しているかといった観点が見られます。いわば文を超えた作品テキストの中で係り結びの表現を捉らえてその価値を問うのです。個々の文の中での意味用法を捉えたり、歴史的な変遷を考察することは基礎的な観点として重要ですが、一方で、個々の資料や文脈の中でいかに係り結びが機能しているのかという観点は、言語が生き物である以上、最終的には避けて通れない観点であると思います。このような、実際の言語表現の中で、現象の意味を捉えることこそ表現研究の真骨頂であろうと思います。

会誌の50号以前と以降では投稿論文に大きな転換が見られるように思われます。50号以前では表現学の基礎的原理を考察した開拓的な論文が多いですが、50号以降ではそれを踏まえた応用的、実践的な論文が増えてきたようです。学会が自らの基礎を固めて確固たる研究分野として確立されていく階梯がうかがえます。100号を超えた今後にはどのような展開を見せていくのか、研究生活の後半を迎えた筆者にとって楽しみでもあるし、自分もそれに少しでも参与できればと思っています。　（同志社大学）

愛ある学会誌

長沼　英二

『表現研究』に拙文が初めて掲載されたのは、第55号でした。これは、『表現学会50年史』でご紹介した、表現学会東京例会で初めて口頭発表し、半沢幹一氏にコテンパンにやっつけられたものを書き直したものでした。

例会で頂戴した、さまざまなご意見を踏まえて書き直し、投稿したのですが、掲載されるか否か、不安な気持ちでした。内容については、自分なりに自信があったのですが、インパクトという点では、不足としか言いようのないものであったからです。

事務局から掲載決定のご連絡を受けたときには、嬉しい気持ちと驚きとが同時に生じました。塚原先生も、すぐさま採用されたことに少し驚いていらっしゃったことを、よく覚えております。いま振り返ると、新入会の若者を励ます、という意図があったのではないか、と想像されます。やはり、「愛ある学会」です。

さて、その拙文は、私が表現について真正面から取り組んだ最初のものでした。本格的な表現学会デビューを果たせたわけです。

そののち、4回、『表現研究』に拙文が掲載されました。そのいづれも、印象深いのですが、少し愉快なのが第66号に掲載されたものです。

第66号では、半沢氏の御論文の後に、拙文が掲載されています。どちらも、第34回表現学会全国大会で口頭発表したものでした（他にも同大会で発表された御論文が掲載されています）。半沢氏の御論文は、当時、氏が幹事をお務めになっていた、〈青葉ことばの会〉という研究会での私の口頭発表に「触発」（付記での氏の表現）されたものでした。

しかし、半沢氏のご発表を伺った私は、「そういうことをやるのなら、こういうふうにやるのだ」と、お手本を見せていただいたと理解し、痛快な気分になりました。その御論文の後ろに、自分の作物が並んでいるのですから、『表現研究』第66号を受け取ったとき、愉快な気分になったのは、当然であったと言えましょう。

現在、手許に、『表現研究』がほぼ揃いであります。入会以前の号は、古書肆で購入しました。「ほぼ」というのは、6冊が欠号になっているからです。いづれも古い号で、入手は、困難と思われますが、根気よく探して、第100号までの全巻を揃えるのが目標です。

『表現研究』のよりいっそうの発展を、お祈り申し上げます。　（明治大学［非］）

表現研究の苦楽―誤解から生じた「青い月」の意味

吉村 耕治

英語の「青い月」の意の表現を含む慣用句“once in a blue moon”（初出例1833年）は、“rarely, exceptionally”（めったにないことだが、例外的に）を意味する。初出例が1821年の“blue moon”は、元々は「1つの季節の3カ月間に満月が4回ある時の3回目の満月」「めったにないこと」を意味する。ところが、1946年に出版された雑誌に間違った記載が生じ、その誤謬の引用が、1980年1月のアメリカ合衆国のラジオ番組で流されたことによって、一般に普及してしまった。日本の英和辞典にも“blue moon”の意としては、誤解から生じた「ひと月の内の2度目の満月」「長い期間」という定義が記載されている。NHK『ラジオ英会話』（2014年8月号）にも、「2回満月がある月の2番目の満月」（p. 54）という誤解から生じた意味が引用されている。

4回満月が見られる季節の3番目の満月という意と、2回満月がある月の2番目の満月という意の間には、満月の時期に実質的な違いが見られるが、誤解から生じた意味が広まりつつある。時間が経過し、読者が理解しやすい説明も加えられている。NHK『ラジオ英会話』（2014年8月号、pp. 52-54）には、“blue moon”は、「めったにない」の意で、頻度の表現の中では凝った語句で、“How often do you dye your hair, Sue?”（髪はよく染めるの、スー？）という質問に、“Oh, once in a blue moon.”（そうですね、ごくごくたまに。）と返答している。

実は“blue moon”だけではなく、“pink moon” という表現も実在している。通常は春夏秋冬の4季節で満月が3回ずつ見られる。その12回の満月は、春には“egg moon”（卵の月；別称pink moon）、“milk moon”（ミルクの月；別称flower moon）、“flower moon”（花の月；別称strawberry moon: イチゴの月）の3回、夏には“hay moon”（干し草の月；別称

buck moon: 雄ジカの月)、“grain moon”(穀物の月；別称sturgeon moon:〔キャビアを産卵する〕チョウザメの月)、“fruit moon”(果物の月；別称harvest moon)の3回、秋には“harvest moon”(収穫の月；別称hunter's moon)、“hunter's moon”(狩人の月；別称beaver moon: ビーバーの月)、“moon before yule”(クリスマス前の月；別称cold moon: 冷たい月)の3回、冬には“moon after yule”(クリスマス後の月；別称wolf moon)、“wolf moon”(オオカミの月；別称snow moon: 雪の月)、“Lenten moon”(四旬節〔受難節〕の月；別称worm moon: 幼虫の月)の3回の満月が見られる。月の満ち欠けの1周期は、平均すると約29.53日で、1か月の平均日数が約30.42日であるため、1年に満月が13回ある時がある。元々は、その追加の1回が“blue moon”と名付けられていた。2年から3年に1回のみ、“blue moon”の満月を見ることができる。

ことばは常に変化している。元の意味と誤解から生じた意味の両方の行方を見守ることも、表現研究の楽しみである。100号に至るまでの苦労や進化や知の蓄積を糧にして、表現学の新しい発想が生まれる可能性を実感しています。

(関西外国語大学)

日本語と英語の表現の違いを「さんぽ」の歌から考える。

佐藤　明宏

宮崎駿アニメは，世界的に受容されている日本が誇るべきアニメ作品である。このアニメの英語版には，その挿入歌が日本語のまま入っているもの『天空の城ラピュタ』や『千と千尋の神隠し』等もあるが，一方で，日本語の歌詞が英語に訳されて入っているものがある。その一つが『となりのトトロ』の冒頭の歌「さんぽ」である。その1番の歌詞と英語版の歌詞とをあげてみると次のようになる。

「あるこう　あるこう　わたしはげんき Hey, let's go Hey, let's go I'm happy as can be／あるくの　だいすき　どんどんいこう Let's go walkin', you and me Ready, set Come on, let's go／さかみち　トンネル　くさっぱら Over the hill Across the field Through the tunnel we'll go／いっぽんばしに　でこぼこじゃりみち We'll run across the bridge And down the bumpy gravel road／くものす　くぐって　くだりみち Right beneath the spider's web Ready, set Let's Go」

日本語の「あるこう」は，呼びかけではあるが，誰に対して呼びかけているのかがはっきりしない。自分の決意とも読み取れる。それに対して，英語のHey, let's goやLet's go walkin', you and me は，呼びかけられている相手が存在している。鈴木孝夫は日本語の文構造の特徴を「対象依存型の自己規定」ととらえ、「対象依存型の自己規定とは、観察する自己の立場と観察される対象の立場が峻別されずに、むしろ両者が同化されることを意味する」(鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書、一九七三年、二〇〇頁」) と述べているが，ここにそういう他者と自己との区別を峻別しない日本語と，峻別する英語との違いを見ることができる。ま

た，日本語の「さかみち　トンネル　くさっぱら」に相当する英語の部分「Over the hill Across the field Through the tunnel we'll go」には，「Over／Across／Through」の前置詞が入っており，そこにも場所を規定する言語のあり方の違いが見られる。さらに最後の「くものす　くぐって　くだりみち Right beneath the spider's web Ready, set Let's Go」の「Ready, set Let's Go」を日本語で言うなら「位置について。用意。ドン！」であり，英語の訳詞の方がより相手に対してアクティブに働きかけていると言えよう。もちろん，これは歌詞であり，音節を同じくしてリズムを整えるという条件に規定された訳詞であるから，正確な1対1対応の表現とはなってはいない。ただ，それだから逆に言語の特徴が表れているとも言える。

私は，附属高松中学校の3年生にこの日本語の歌詞と英語の歌詞を比べさせる授業をいくつか試みている。国際化が進んできた今こそ，こういう言葉の表現の違いの中に文化の違いをとらえていくような授業が必要なのではないだろうかと考える。　（香川大学）

『表現研究』第100号に寄せて

定延　利之

100号目の『表現研究』発行，おめでとうございます。

恥ずかしながら，私は数年前に表現学会からお誘いを頂いて入会し，そこで初めてこの学会のことがわかり始めてきたといったありさまで，実はこの学会について，最近まであまりよく存じ上げていませんでした。が，この学会の設立50周年記念事業として，それまでの『表現研究』に掲載された優れた論文を『言語表現学叢書』（2013，清文堂出版）という形で編集し直して出版するという計画が立ち上がり，この3年間は僅かながらその編集のお手伝いをさせていただくことがありました。作業を通して感じられたのは，『表現研究』が今日の視点から見ても価値を失わない，日本発の貴重な考察の宝庫だということです。『言語表現学叢書』は全3巻とはいえ紙数がかぎられており，載せられない論文が少なくなかったことは，いまも残念に思っています。

今後，表現学会がさらに発展し，この雑誌が魅力あふれる研究発表の場として引き続き多くの会員に親しまれていくには，この学会の成果を若い世代の研究者に伝えていくことが重要でしょう。出版された『言語表現学叢書』も，まさにそのような役目を担うべくして出版されたのだと思います。若い会員の皆さんには，ぜひ『言語表現学叢書』や『表現研究』を手にとって，先達の到達点を学び，それを乗り越える新しい表現研究をしていただきたいと思います。

若い会員の皆さんに申しあげたいことがもう一つあります。それは，不採択通知に腐るな，ということです。学会誌『表現研究』は会員の研究発表の場ではありますが，ご承知のように，投稿された論文の全てが掲載されるわけではありません。私も投稿論文を査読して厳しい判断を下すということが時にあります。これ自体は厳正な審査の結果で，どうしようもないことです。しかし，皆さんが受

けるショック，学会から拒絶されたというショックは，実に大きなものがあるということをお察しします。特に，野心的で革新的な論文を「表現学会ならわかってくれるのでは」と投稿された皆さん，「この学会に見る目はないのか。コンチクショウ！」と，暗澹たる気持ちになられたこともあるのではないかと思います。それはよくわかります。なぜなら，私にも同じ経験が（山ほど！）あるからです。

不採択通知を受け取っても，『表現研究』のことはともかく，表現研究を嫌いにならないでください。多くの読者の共感を呼び，多くの仲間を作り，表現研究のシーンを変えていくにはどういう書き方，考え方をすればよいのか，検討を続けてください。そうすれば，『表現研究』110号は皆さんのものになっているでしょう。（神戸大学）

『表現研究』の思い出

石出　靖雄

学生時代、『表現研究』は私にとってかなり権威のある研究誌であった。バックナンバーを図書館で漁り、コピーをとって勉強していた。特に、糸井先生の御論をはじめ物語の表現に関わるものについては強い興味を持って読んだ。『國語学』・『日本語の研究』には優れた論文が発表されるが、表現分野の論文が掲載されることはあまり多くなく、『表現研究』は私にとって貴重な情報源でもあった。今でも『表現研究』に掲載された論文を中心にして、その著者の他の論文や参考文献に挙げられた論文にあたるということをしながら、表現研究の情報を集めていくように努めている。

修士課程を終えてから表現学会東京例会に出席させていただくようになり、研究発表の機会も与えていただいた。自分の論文が『表現研究』に初めて掲載されたのは、東京例会の研究発表を元にしたものである。たくさんのご指摘をいただきそれを修正してやっと掲載されたときには、自分にとって権威である研究誌に自分も載るのだということに、感動と誇りを感じたものである。指導していただいていた岩淵匡先生にもほめていただき、それからは一人前に扱っていただけるようになった。『表現研究』に掲載されたということは、自信にもなりその後の研究のモチベーションにもなっている。

その後も何度か『表現研究』に投稿させていただいている。投稿するときにいつも苦労するのは、分量（字数）である。原稿用紙30枚程度という分量は、なかなか難しい。私は主に小説の表現について研究しているが、論文を書くときには小説を引用しなければならないことが多い。引用が多いと、自分の論を展開する分量が減ってしまう。短く引用しようとすると小説のコンテクストが十分伝わらないおそれが出てくる。そのせめぎあいが難しい。注や参考文献一覧を最小限にとどめるなど、いろいろ苦労してどうにか制限字数に収めて投稿する。しかし、修正採用になったとき、また問題が起きる。不十分な点をご指摘いただき修正しようとすると、またもや字数制限にひっかかる。もともとギリギリの分量で提出しているので、簡単には身動きがとれない。1文字単位でいろいろなところを削

りながらどうにか修正してしのいできた。

このように、『表現研究』にはさまざまな思い出がある。私にとって、研究分野の近い方々の論文を多数読むことができ、また拙論を読んでいただけるかもしれない『表現研究』は、非常にありがたい大切な研究誌である。　（明治大学）

香西先生のレトリック論について

森　雄一

『表現研究』第90号に掲載された、「虚偽論より見た人間の思考上の癖について」は、短いながらも香西秀信氏のレトリック研究の特色がよくあらわれた名論文である。

香西レトリック論の特色とは何か。第一に、人間の思考や言語行動に対する深い理解である。自戒もこめて述べるのだが、ともすれば表現の表面的な分析に終始しがちな表現学・文体学・修辞学という分野のなかで、人間の思考パターンをふまえたそのレトリック論は異彩を放っている。上の論考では、人間の「論理」癖―相手の発言が主張だけで根拠が述べられていないとき、無意識のうちにその根拠を推測し、補って理解すること―が、いかに虚偽を発生させるか、そしてそれがレトリック的な言明にどのようにつながっていくか、ということが見事に解き明かされている。第二には、興味深い（ときとして人を食った）用例の提示であり、これが香西レトリック論の大きな魅力となっている。上の論考のなかから短いものをあげると、賛成か反対か聞き手が当惑してしまう提案の例として次のようなものが提示されている。

「中学生が自転車通学するときは、必ずピンク色の三角帽子を着用させるべきだ」

確かに「賛成か反対か聞き手が当惑してしまう提案」の例にふさわしい。と同時に、読んでいてちょっとびっくりし、その後少しくすりとしてしまう。文芸作品ならいざしらず、このような効果を持つ論文というのはあまりない。第三に、古今東西の文献から博捜された的確な引用。香西氏の著書・論考から引用文献をリストアップしてみると、いかに広い範囲から先行する論者の知見が引かれているか驚かされる。それが、単に博識ぶりを示すだけでなく、その論考のそのパーツにふさわしいものがぴたりと引かれている。上の論考においても柳田國男『妖怪談義』とJ・S・ミル『論理学大系』からの引用が、まさにその場にもっとも適したものとして存在している。

◇　　◇　　◇

香西秀信先生のお名前を初めて知ったのは、『反論の技術』の著者としてである。野矢茂樹著『論理トレーニング』に、「『反論の技術』という本は良書である。情熱があり、理論があり、そして実質的な具体例が豊富にある」と紹介されていたため、すぐ購入して読み、深い感銘をうけた。その後、刊行された御著書を全て読んでいたのだが、表現学会のシンポジウムでご一緒させていただくという、またとない機会を持てたのは大きな喜びであった（上の『表現研究』論文は、そのシ

ンポジウムの発題をまとめられたものである)。香西先生と直接お話させていただくことは、もはやかなわなくなってしまったが、先生が遺された多数の御論考から筆者は学び続けるであろう。

(成蹊大学)

香西修辞学が目指していたもの

柳澤　浩哉

事務局長を拝命している私は、本来ならこのエッセーに学会運営についての雑感を書くべきだろう。だが、今回は昨年4月に急逝された香西秀信理事について書かせていただきたい。氏は西洋修辞学研究の第一人者であり、その研究は表現学の観点から見ても極めて示唆的だが、55歳という年齢が災いし、いずれの学会も氏の追悼記事を掲載していないからである。

香西氏の亡くなった後、私は何度か宇都宮大学を訪ねて、同僚の方から氏の構想していた修辞学を断片的にお聞きした。そのキーワードは「論証子」(ろんしょうし)という独自の単位だという。氏が構想していた修辞学はおそらく次のようなものである。

> 人間のあらゆる思考は、「論証子」という有限個の単位の組み合わせとして記述することができる。「論証子」の選択と組み合わせパターンから、古今東西の思想を大胆かつユニークにとらえ直す。

一言に言えば、アリストテレスのトポス論を現代に蘇らせる試みである。アリストテレスのトポス論は氏の出発点であり、西洋古典修辞学におけるトポス論は氏のライフワークの一つであった。

ただし、この壮大な構想は修辞学の枠に収まるものではなく、目指すところは修辞学よりもむしろ、人間の思考の類型化に執念を燃やす社会学に近いように思われる。そして、その完成形は例えば、五つの方向(ペンタッド)から人間の動機の把握を試みたケネス・バークに似たものになるのではないか。事実、香西研究室に残されたブリュデューとケネス・バークの原著には、おびただしい書き込みが残されていた。知の巨人であった香西氏なら、バークに比肩できる壮大な知の見取り図を作ることが出来たに違いない。

香西氏は『表現研究』90号に載せたユニークな虚偽論において、虚偽を思考の過ちではなく、人間の思考の癖の痕跡と規定している。この論文は虚偽論から「論証子」を抽出する試みの一部だったと思われるが、この論文に「論証子」のアイデアは書かれていない。虚偽論の整理から単純に抽出できるようなものが「論証子」にはならないのだろう。「論証子」の決定には、虚偽論を含めた修辞学全般、あるいはそれ以上のものが必要なのかもしれない。

「論証子」の実態は想像もつかないが、香西氏にはその具体的な形はもちろん、そこから立ち現れる壮大な世界までが鮮明に見えていたに違いない。「論証子」のアイデアすら発表する時間のなかったご無念は察するに余りある。　(広島大学)

いつから、いかに、そしていずこへ

半沢　幹一

手許にあるもっとも古い号は、昭和51（1976）年9月30日発行の第24号である。通常会員年額会費が￥2,000、編集兼発行人が今井文男先生という時代。100号から見れば、最初の4分の1からのお付き合いになる。

その年度に入会したことになるが、ちょうど大学院に入った年でもある。どのようにして表現学会のことを知ったのか、まったく記憶がない。『表現研究』を手にしたこともなかった。もしかしたら、当時、国立国語研究所にいらした中村明先生をお訪ねした折に、教えていただいたのかもしれない。

そして、初めて『表現研究』に自分の論文が掲載されたのが、2年後の第28号である。その年の全国大会のシンポジウム「仮定法と過去形の問題」における発表を原稿にしたもので、それが学会誌デビューとあいなった。しかも自分にとっては、仮定法なり過去形なりについて公けにした、唯一の論文である（トホホ）。

その後は、さまざま形で拙文が記名・無記名を合わせ、何度も誌面を汚すことになった。大会の研究発表者として、あるいはシンポジウムの講師や司会としてまとめたもの、純粋に投稿したもの、事務関係では、彙報欄の雑記事、編集後記、新刊紹介などなど。こういうエッセイは新たな1ジャンルである。まだ書いたことがないものといえば、幸いにも？訃報記事くらいであろうか。

学会事務局を預かっている間は、投稿論文の査読・確認に多くの時間と労力を費やすことになった。表現学会は、言語表現を対象とするかぎり、基本的には何でも有りの学会である。そのせいか、内容も論文としてのレベルも多種多様で、頭を抱えることもたびたびだった。それでも、修正採用と評価された論文が、あれやこれやの注文によく応えて、掲載の運びになった時には、やり甲斐を感じたものである。

入会してから、はや38年。『表現研究』は年2冊の発行であるから、これまでに75冊に出会ってきた。入会以前の号も、ある時、古本屋の目録で30号までの合本を見つけて入手したから、すべてを持っていることになる。

ときどき必要に迫られて、バックナンバーを取り出し、そのついでに、以前には気付かなかった論文が目に止まって、その方が役に立ったこともある。昨年、創設50周年記念で出版された『表現学叢書』（全3巻）は学会誌のアンソロジーとしての空前の試みではないだろうか。こちらも手近に置いて、仕事の合間にあちこち頁をめくって眺めては楽しんでいる。

『表現研究』が第100号を迎えたこと自体に、特別の感慨はない。入会以来、何号まで続くかなど考えたことがなかったし、今も変らない。ただ気掛かりなのは、今後も『表現研究』という誌名にふさわしい「表現研究」の論文が載り続けるかということである。それはたぶん、他からの評価以前に、今後の会員自身の自覚の問題になるだろうと思う。

（共立女子大学）